配食で高齢者を支援

NPOスバル 行政サービスの仲介も

約23万人が暮らす大阪市平野区は、高齢化率が20%を超え、高齢化が進んでいる地域だ。配食サービスに注力しているNPO法人「NPOスバル」の取り組みを紹介する。

約30年前に結婚のためオーストリアから来日した村居ブリギッテ理事長は「平野区は生活保護受給者が多く、貧しい生活をしている高齢者が多い。配食事業を始めたことで在宅高齢者の課題が浮かび上がってきました」と説明する。

具体的には、利用者の嗜好に合わせたものでないと残飯も多く出ること、生活保護の制度などを知らずセーフティネットが機能していないケースが見られること、高齢者は会話に飢えていること、などが課題だ。

「高齢者は体が不自由でも、遠慮して手助けを求めない。配食することで『ドアを開けてくれる』ため、通い続けることで信頼感を得ることができます。お弁当を届けながら、世間話などもし、困っていることを聞きだし、行政につないだり、買い物やゴミ出しなども手伝っています」

◀中央がブリギッテ理事長。日々利用者と顔を合わせる

同法人は、2004年に任意団体として設立。現在は365日昼と夜の2回、250食から270食程度を提供しており、メニューはブリギッテ理事長自らが1週間ごとに考案しているという。

「栄養バランスを考えたうえで焼きそばも度々提供しますが好評です。お寿司も月に1度は出しますし、季節に応じたメニューも取り入れることで会話も弾みます」

また、米の量は他の配食サービス事業者は160グラムが一般的だが、200グラムほど盛り付ける。これは2食分にすることができるからだ。

「1ヵ月2万6000円ほどで暮らす90代の男性がいたのですが、電気をつけず、ロウソクを灯し、食事はうどん一玉のみという生活をしていました。それでは栄養不足に陥り、精神状態も不安定になってしまい、健康を維持することは難しくなります」

これまでの経験で、「常に誰かが気にしてくれている」という安心感があるだけで、独居であっても自立した生活を維持できることを実感したブリギッテ理事長。

「食事は生きることそのもの。配食サービスは利用者と直接顔を合わせることのできるとても大切な事業です。『ここにいるからいつでも呼んで』という存在でありたいと思います。また、見守りにも結び付けることで、介護費用の抑制にもつながると考えています」

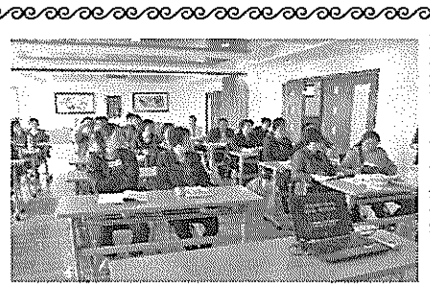
中国の高齢者マーケット ～介護・不動産事業の行方～

ゲストハウス社長 松山英樹

第22回 拡大する福祉機器展

リハビリ技術に期待大きく

2013年5月16日から5月18日まで第8回中国国際福祉機器展示会「チャイナエイド」が上海万博会場跡地で開催されます。1万7000㎡の展示面積で16ヵ国400社以上が出展し、昨年の来場者は政府、大手病院、高齢者施設、シニア関連など各業界関係者や一般の方まで2万1536名がご来場されました。


▶当社ヘルパー研修センターでの講義の様子

日本からはニチイ学館等大手も出展され、弊社も現地企業として教育、介護をテーマに出展しました。このイベントも年々規模も大きくなり上海や中国での関心の高さがうかがえます。

1億人を超える高齢者人口を抱える上海では介護保険、不足する老人ホーム、各種介護施設などの整備を急ピッチで進めている状況です。

特に上海では高齢者人口が24・5%まで達しており2015年には30%に達すると予想されています。

2015年までには中国の高齢者介護サービス事業の市場規模は4500億元になるといわれ日本の介護技術、介護福祉機器等、ビジネスチャンスが大いにある状況です。特に介護とリハビリ分野には大きな可能性を秘めています。

弊社の上海シニア事業でのヘルパー養成学校（上海浦東新区慧智源職業技能培訓中心）と老人ホーム経営会社（慧智源（上海）養老服務発展有限公司）でも介護はもちろんですが、特に不足しているリハビリの分野を日本の技術で補うために、5月21日、上海で理学療法士の先生を招いて講演を開催します。

政府関係者、老人ホーム院長、各施設団体、大手病院などの多数の参加希望者があり日本のリハビリには大きな期待が寄せられています。

上海一のリハビリ病院の院長や副院長も参加いただきますが以前そのリハビリ病院見学をさせて頂いた時にリハビリ担当医が足りず、もちろん施設も不十分で待機者を多く抱えている大変な状況あるとお伺いしました。

弊社の上海研修センターや老人ホームに日本のリハビリ技術を応用し、より高度に中国のご老人にお役に立てる施設を目指していこうと考えています。

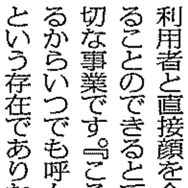
中国のシニア関連事業は日本の10年～15年は遅れていますがその決断、実行力の速さから5年あまりで日本に追いつくと言われています。

その為にも日本の技術や施設運営のよい点をどんどん取り入れたいとお話を頂きます。次回はこの日本式リハビリ講習会や中国国際福祉機器展示会の情報を記事にしたいと思います。

著者プロフィール
ゲストハウス社長。2007年から高齢者住宅リボーンシリーズを関西圏で展開。中国市場開拓を目指し、上海に中国シニア事業会社設立。

介護職向け ホスピタリティ講座

4回シリーズで開催


植村ゆか氏

福祉コーチとして活動する植村ゆか氏は、5月29日より全4回シリーズで、介護のホスピタリティをテーマにした講座「福祉を生きる百年塾」を都内で開催する。講師に、元リッツカールトン日本支社長の高野登氏を招く。

第1回目は5月29日、「介護観（人生観）を見つめ返す時間～百年先に届くあなたの想い～」をテーマに東京都北区の「北とぴあ」で開催する。時間は19時から20時40分。懇親会も行う。

2回目は8月26日、第3回は11月26日、第4回は来年2月27日で、いずれも19時から。

参加費は7000円（懇親会費は別）で、定員は30名。

コミュニティづくりセミナー

（社）コミュニティネットワーク協会（東京都中央区）、コミュニティネット（同）は、6月1日と19日に「多摩で10年コミュニティをつくる会セミナー」を開催する。

1日は「認知症になっても地域で豊かに暮らし続けるために」をテーマに、（財）長寿社会開発センターの石黒秀喜審議役が、自宅で住み続けるために、認知症当事者の心構えや、家族や医療・介護専門家のサポートの仕方などを紹介する。

19日は「『プライマリ・ケア』って何…？自分にあう主治医の見つけ方！～身近な地域で適切な医療を受けるために～」をテーマに、あいクリニック中沢の亀谷学院長が、プライマリ・ケアの考え方や主治医選びのポイントを解説する。あいクリニック中沢は、コミュニティネットが運営する高齢者複合施設「ゆいま～る中沢」に併設して8月に開院する予定。

会場は多摩市のゆいま～る中沢ホールで、定員は40名。参加費無料。